

吉田桃樹「槃斝余禄」について

板坂, 耀子
福岡教育大学教授

<https://doi.org/10.15017/8932>

出版情報 : 語文研究. 96, pp.1-14, 2003-12-26. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



吉田桃樹 「槃游余録」 について

板 坂 耀 子

はじめに

この作品と作者については、すでに鈴木棠三氏が『近世紀行文芸ノート』（昭和四九年 東京堂出版）の中で「吉田桃樹と槃游余録」の一章を設けて著者の伝記と作品の内容を紹介されている。この論では、それにつけ加えるかたちで、(1) 現存する諸本の書誌、(2) 作品の文学性とその近世紀行の中での位置、の二点について述べたい。

一 作者について

鈴木氏が「譚海」の文章などを引きつつ紹介されているように、吉田桃樹は江戸に生まれ、当初は塚原氏であったが、

後に吉田家の養子となり、養父の後を継いで公吏となった。雨岡とも称し、字は甲夫、通称は忠蔵。その号を大きな海亀を示す「鰲」の文字を含む「鰲岐」とするのは、大川橋（吾妻橋）の架橋に功績があったとの逸話とも関連があるかと鈴木氏は推測される。その生没年も致仕の時期も明らかでない。しかし「槃游余録」の最初の旅を行う天明八（一七八八）年にはすでに職を退いており、鈴木氏は、これは田沼意次の失脚に伴う何かの事情があったかと推察注1されている。

おそらくはまだ老齢とはほどとおい時期に、そのように職を退き閑暇の身となった桃樹は、その精力と時間とを長途の国内遊歴に充てた。そうやって記されたのが、「槃游余録」全六編である。

鈴木氏は、旅の動機を、致仕にまつわる事情もあって江戸

を離れたいという思いがあったのに加え、従来から願っていた老後の行脚の予定が思わぬ退職によって早まったのであるうとしておられる。また、「樂游余録」の最初の数編に序文を寄せている平沢元愷^(注2)の影響と、古代研究への強い関心もあげられる。

桃樹の致仕に関する事情は、紀行を通読してもうかがうことはできない。だが、後に述べるような旅先での行動、観察、記録のさまからは、有能で決断力に富む官吏であったことがおのずと浮かび上がる。「所歴日記」(寛文四)を記した牢奉行石出吉深、「未曾有記」(寛政十一)を記した幕府目付遠山景晋、「官遊奇勝」(文化十三)を記した小石川薬園長渋江長伯のような、長編の紀行を記した官吏たちに共通する印象でもあり、江戸時代の公吏たちの優れた行動力と判断力、該博な知識や視野の広さ、人間性の深さ、といった質の高さを、これらの紀行は読む者に伝える。

二 諸本について

先述したように、樂游余録は全六編から成る。鈴木氏も指摘されるように旅の規模でも作品の長さでも、この六編は不揃いで、長短が極度に異なる。しかも後述するように、短い

旅の短い紀行が必ずしも文学的な価値が低いとは限らない。江戸時代の紀行作家で多作者といつてよい人々の中には、たとえば清水浜臣や小津久足のように、作品の名前をその都度変えている者も、先にあげた「所歴日記」の石出吉深、「未曾有記」の遠山景晋、「官遊記勝」の渋江長伯のようにすべての作品を一つの題名で統一する者もいる。この桃樹は後者であつて、六編すべてを「樂游余録」と題している。全作品を何らかの統一された作品としてとらえる意識があつたかもしれない。ただし、初編の冒頭の目録には「道のついで」という内題が併記されており、各編にそれぞれの題名をつけようとした可能性もある。

管見の書誌について述べておきたい。

国会図書館。特七〇 八三〇 二〇一。写本七冊。自筆稿本。初編と附録

帙入り。朱色表紙。題簽。二六・八×一八・二cm。外題

「樂游余録」。文化十二年男勇雄序(青色文字、八行、二丁)、

寛政元年平沢元愷序(朱棹、八行、六丁)、同年賀茂季鷹

序(朱棹、八行、三丁)。内題「樂游余録 道のついで」。

目録(上巻)あり。

「第一冊」十行書、五十一丁。「第二冊」二十二丁。「第三

冊」四十丁。「第四冊」二十九丁。「第五冊」四十二丁。吉田桃樹朱印二つあり。「第六冊」二十六丁。「第七冊」三十二丁。

国会図書館 二二三 三三〇。写本六冊。初々四編と附録。文政十二年、重固写。

図書館後補アイボリー色表紙。二七・〇×一九・五cm。外題「槃游余録」。梓題箋。内題など に同じ。字は版下風によく整う。朱少々。頭注あり。「第一冊」十行書、六十三丁。「第二冊」六十九丁。「第三冊」八十三(墨付八十)丁。「第四冊」七十一(墨付六十八)丁。「第五冊」六十八(墨付六十五)丁。「第六冊」末尾に「文政十二己丑孟冬朔天如春向陽書写及未之未卒業 煙霞樵者 翌二日和喧日没前校閲終」と奥書。

国会図書館 わ九一五・五・一。写本二冊。破損のため閲覧できず。

国会図書館 八三九 一。写本二冊。次編のみ。

地模様茶色表紙。外題「槃游余録次編」。二七・四×一九・七cm。梓題箋。十行書、五十七丁。「根岸憲助氏委託本」。「曾山文庫」「愛岳麓蔵書」印あり。平沢元愷、源躬弦、橋千蔭、賀茂季鷹の序文。内題、外題に同じ。末尾に自跋。朱少々。頭注あり。十行書、五十七(墨付五十五)丁。

岩瀬文庫。一六一・二三五。写本八冊。初々四編と附録。清水浜臣所蔵本。

書誌調査の際のカード紛失のため、書型の詳細不明。外題・内題「槃游余録」。一〇行書。「第一冊」百十二丁。初編上巻を収録。「第二冊」七十二丁。初編下巻を収録。「第三冊」五十七丁。別記(初編図録「滄霞遺珠」)を収録。「第四冊」六十三丁。次編を収録。「第五冊」百四十一丁。三編を収録。「第六冊」六十一丁。四編上巻を収録。「第七冊」五十七丁。四編下巻を収録。「第八冊」二十三丁。三編附録として、「伊豆海岸奇勝図」(他の本では三編の末尾に附す)を収録。奥書はなし。

内閣文庫。一七七 一一五七。写本九冊。初々六編と附録。

雷紋地模様黄色表紙。打付書。二七・〇×一八・一cm(やや縦長)。外題・内題「槃游余録」。字体よく整う。朱あり。本の頭注をすべて本文中に入れる。朱印あり。

「第一冊」十行書、百五丁。「第二冊」六十六丁。「第三冊」五十八丁。「第四冊」四十五丁。「第五冊」五十丁。「第六冊」七十五丁。「第七冊」四十七丁。「第八冊」四十二丁。「第九冊」二十八丁。「第十冊」十八丁。

内閣文庫。(編二冊)一七七 一一四四。写本二冊。

初編のみ。

茶色（もとは白か）表紙。題簽。二七・〇×一九・〇cm。
外題・内題「槃游余録」。〔第一冊〕百丁。の第一冊に同じ。〔第二冊〕七十一丁。の第二冊に同じ。

内閣文庫。（地三冊）一七七 一一四五。写本三冊。
三編のみ。吉田長友老所蔵本を寛政四年に写。

小豆色表紙。梓なし題簽。二七・二×一九・六cm。外題
「槃游余録 天（地）（人）」。内題「槃游余録 三編 上
（下）」。「見返しに「吉田桃樹著 遊豆紀行三巻 寛政四年
壬子從閏二月至五月」と書き入れあり。朱あり。「晁水図
書」朱印あり。〔第一冊〕六十四丁。貼紙多し。〔第二冊〕
五十一丁。〔第三冊〕三十三丁。末尾に「吉田長友老蔵借
之影写納栖隠館」と奥書。

内閣文庫。地一五二冊二八 三八。写本一冊（「撰
津徴」巻九十六）。初編上巻末の大坂見物の部分のみ。

青地に黒の格子模様表紙。題簽。外題「撰津徴 巻九十
六」。内題「撰津徴 外集 春部 槃游余録 旅日記」。十
五丁。その後絵図など十八丁。次の「旅日記」九丁は別
の作品。

東京大学大学南葵文庫。J四〇 三八六。写本十冊を
二冊に製本。初、四編。

茶色に白の横縞表紙。題簽。二七・五×一九・〇cm。外
題・内題「槃游余録」。「南葵文庫」「坂田文庫」「養聞齋文
書部」朱印。〔製本第一冊の内〕「第一冊」四十八丁「第二
冊」五十四丁「第三冊」三十四丁「第四冊」三十八丁「第
五冊」四十丁。第四冊までに初編、第五冊に次編を収録す
る。〔製本第二冊の内〕「第六冊」六十丁「第七冊」三十七
丁「第八冊」四十五丁「第九冊」六十一丁「第十冊」五十
七丁。第八冊までに三編、第十冊までに四編を収録する。
奥書はなし。

無窮会図書館神習文庫。七一・一〇・写本一冊。次編の
み。「桃樹大人紀行」。寛政二年源いそじ写。

白地に小豆色の格子表紙。題簽。二七・〇×一八・二cm。
外題「桃樹大人紀行 全」、題簽横に打付書で「槃游余録
次編」。内題「槃游余録次編」。十行書、五十二丁。寛政二
年五月源いそじの奥書と、万葉仮名の長歌及び短歌を末尾
に附す。

東京大学史料編纂所。二〇四五 二六。写本六冊。初
編と附録。明治十七年、本を写。

薄茶と白の横縞表紙。題簽。二七・〇×一九・〇cm。外
題・中表紙題・内題「槃游余録」。十行書。〔第一冊〕五十
五丁。明治十七年九月、三級写字生三栗中実写、名倉信敦

校正の奥書。「第二冊」五十九丁。明治十七年七月、二級
写字生赤木賢則写、松平乗承校正の奥書。「第三冊」七十
三丁。七月、福井安宅写、乗承校。「第四冊」六十三丁。
七月、牧野義順写、乗承校。「第五冊」五十九丁。七月、
松本寛茂写、乗承校。「第六冊」五十九丁。七、八月、山
中政篤写、乗承校。末尾に太田元貞の「墓表」を附す。第
三冊までに初編、第五冊までに四編、第六冊に本の第六
冊と同じ、初編の図録を収録する。

東北大学狩野文庫。三 七九一八二。写本二冊。初
編のみ。

茶色表紙（後補）。題簽。中表紙は白色。二二・五×一
六・五cm。外題・中表紙題・内題「槃游余録」。網野亭吉
氏旧蔵書朱印。頭注、朱あり。「第一冊」九十五丁。上巻
を収録。「第二冊」五十七丁。下巻を収録。末尾は「識語」
で終わり、「中邨連署」はない。

東北大学。本館内C三 一六・二四。写本（横本）二
冊。初、四編。安政四年梅花翁写。

紫紺布表紙。布題簽。一三・五×一九・〇cm。文字は細
かく美麗。頭注、朱あり。外題・内題「槃游余録」。二十
二行書。「第一冊」百二十九丁。初編、図録。次編を収録。
「第二冊」百十七丁。三編、四編を収録。梅花翁の奥書と

「ゆきいたりみるこちしてうつして四もの山川めぐら
ひしにき」の歌が末尾にある。

宮内庁書陵部。四五八 一。「片玉集」十四、十五、
十六。初編のみ。寛政辛亥藍川員正写。

写真で閲覧。大本。題簽。外題「片玉後集 十四」、「槃
游余録」。内題「片玉後集卷之十四」、「槃游余録」。「第一
冊」十一行書、五十八丁。「第二冊」十一行書、五十六丁。
「第三冊」十一行書、七十丁。末尾に寛政辛亥、藍川員正
写の奥書。第二冊まで初編上巻、第三冊が下巻。

三 紀行文学としての面白さ

鈴木氏は『近世紀行文学ノート』の中で「槃游余録」の文
学性について、「強いて注文を付けるならば」と断った上で
「吉田桃樹は本質的には文献派であり、その面では大車輪で
努めているが、観察眼についていえば、生新かつ精緻という
には、やや物足りない点があるように思われる」と、必ずし
もあまり高くは評価されない。同書中で氏は「千種日記」
（大森固庵 天和三）の面白さに注目しておられ、あるいは
それと比較してこのような印象になったのである。しかし、
たしかに冒頭から、普通の紀行ではめったに登場しない荷物

持ちの従者を派手に紹介して、一気に読者をひきつける「千種日記」のような、読み物としての配慮には欠けるが、先に述べた吉深や景晋、長伯、ひいては前期の代表的紀行作家の貝原益軒などと比しても、桃樹の紀行は決して文学性においてそれらの作品に劣ってはいない。平沢元愷が、初編の序文で、「今読_レ甲夫紀行」。將_レ囃_レ臍_レ耳。其書以_二国字_一行。読_レ之如_二目撃在_レ前」といった賞賛を呈しているのは、余裕を持った謙遜でもあろうから額面通りには受け取れないにしても、やはりその、平明で気どらず、無駄のない正確さでつづられる記事は、充分に近世紀行の名作の一つと呼ぶに値する。

(一) 各編の概要

各編の行程については、鈴木氏が『近世紀行文芸ノート』で詳述されているので、ここでは簡略に述べる。

初編は、書誌を見てもわかるように、上下二冊になっている天明八年の西遊の大旅行。冒頭に平沢、賀茂らの序文を附し、目次や「道のついで」の副題もあるなど、体裁がきわめてよく整つた。

その行程は、伊勢神宮参詣のついでに、「相模、伊豆、駿河、三河、遠江、尾張、美濃、伊勢、志摩、伊賀、大和、河内、和泉、山城、摂津、紀伊、播磨、讃岐、備前、備中、備

後、安芸、周防、石見、出雲、伯耆、美作、近江、信濃、下野、上野すべて三十にもあまる」みそぢ国々を回ったという壮大なもの。その経路で見聞したものを「とし経ておぼつかなくなりはてなむもほひなければ、ただしき、あやまれるわひだめもなく、山がつ、うら人などかたりしことをも、もらさずかいつく」と冒頭に記す。

おそらく致仕後まもなく、これほど大規模な旅を一気に敢行するというのが大胆であり、あまり例を見ない。体力その他に、それだけの自負もあつたのだろうが、さすがにこの旅行では、ともすれば桃樹の記述は簡略になり、先の鈴木氏の批判はこの一編に関してはかなりよくあてはまる。特に本来の目的であつたはずの伊勢参詣が型どおりにいかにあつさり描かれていたのは、逆に印象に残るほどだ。

次編(二編)は、寛政元年、富士山・雨降山への登山で、これも、友人たちの序文が寄せられ、体裁がよく整つた。初編の半分程度の長さだが、富士登山が中心であるから、それだけ対象がしぼられて、まとまっている。

第三編は、寛政四年、伊豆地方を旅行した、いわば近郊遊覧記。のどかな海辺の旅が中心の楽しい作品で、温泉の描写なども細かい。

第四編は、寛政五年、東北地方の旅で、初編に匹敵する量

と内容である。最初のあたりは初編と同じく、やや見聞したものの多さに振り回され、記述が単調になりがちだが、この部分では鈴木氏が指摘されるように、寺社の行事の詳細な紹介に作者は力を注いでいる。そして後半になると、一つの事柄に長文をついやする興味深い記事が増えてくる。

最後の二作はともに短く、第五編は寛政九年の秩父、第六編は寛政十二年の安房への小旅行。旅の規模でも紀行の量でも小品なのだが、肩ひじ張らない筆致で記される記事の中には、情景をよく伝え、内容も面白いものが多く、紀行文学としてはむしろこの二作が一番まとまっている。

(二) 記事の特徴

このように見てくると、渋江長伯の「官遊記勝」が、やはり最初の長途の旅では比較的簡略だった描写が次第に発展し、最後の短編にいたって最も細やかになる過程と共通するものを感じる。体験や見聞を紀行に記す際の選択の基準や、めりめりのつけ方に関して、めだたないが確実に桃樹の作品は発展している。

ただし、全体を通じて、桃樹の紀行にはいくつかの特徴も見え、それは基本的に変化していない。

土地の奇談

まず、初編の冒頭に彼自らが記すように、桃樹は土地の人々に聞いた伝承や奇談を手を加えずにそのままに記すことが多い。彼自身が「どうかと疑ったが、直接聞いたので」といった断りを付けていることもあり、これは彼のいわば取材姿勢といつてよい。これらの記事が彼の紀行を興味深く精彩あるものにしていく。

たとえば、第三編の三月朔日の記事。山の神と言われる大蛇を十右衛門という土地の男が退治した話である。

「ふもとの中嶋むら忠兵衛がずさ（従者）十右衛門といふもの、三そ（十）とせばかりまへ、草かりにのぼりけるに、かしこ（山の神がいると恐れられていた山）にて、いびきのご系しければ、あやしとて行ってみるに、ふとき四五尺めぐりほどの、おろち、ふぢかづらのうへにはひわたりていねたり。『とし頃、山の神とてかしこみ（怖）しはこれにてこそあれ』とて、おろちのはらのしたを、くぐりつつ、ふとき藤をまとひつけて、うごきなむまにまにしまりぬべきやうにかまへて山をくだり、さらぬふりにてをりぬ。そのよ、しきりに山なり風おこり、いさこをとばし、木の葉まきあげなどして、いといとおどろおどろしかりければ、むら人らあやしみてけり。十右衛門しかじかとかたりければ、むらをさ、おほきに

おそれ、『いかばかりのたたりあらんもしるべからず』とて、十右衛門をおひやらひてけり。その頃はかの山のぼるもの、ふつにあらざりけるを、とし月経て、おるちはほねばかりになり、夫よりのちは心やすけく真柴こり、まぐさかりて、むらむらはさらにもいはず、十右衛門が身にもついたたりなく、いまにすくよかにて、ことし六十まりになりたり。かれにたいめ(対面)してかたりつるままにかいつけぬ」

あるいはまた、第四編の六月十二日の記事。袖ヶ浦近くの龍澤山善宝寺の修理にまつわる話で、例の「ふしぎで納得できないが、現地の人が皆語るのので」との注記をつけて紹介している。

「この寺のすり(修理)には、もちふべき石のおほきさ、かずなどを、かみにかき、与内坂のもとなるうみへながせば、いづこともなく、あつらへし石ども、よのうちに浜へにあらりてあり。寺より、ほふしら木だくみ石だくみなど、つれ来り、かの石どもをえらみ、すみもてしるしつけておきぬれば、その石のみのこり、ふやうのは、いづちともなくうせぬといへり。こはあまりにあやしきことどもにて、うけがたきものから、ちかきころもかくありしを、みな見し』など、人ご

これらに記述には、先入観や固定観念のない、客観的で柔

軟な情報収集の姿勢があり、簡潔で要領を得た書きぶりは能吏としての才能をもしのばせる。

鉱物への興味

だが、桃樹の記述の正確さや冷静さは、有能な官吏の資質というだけではなく、あるいは博物学者のそれと近いかもしれない。彼が日本の博物学の先駆者と言われる貝原益軒の紀行を読んでいることは文中の引用からもわかるのだが、それ以上に、鈴木氏も指摘される第三編での秦樟丸との交流や、以下のような土石への興味や観察を見ると、「さるすぢに、くらければ」と謙遜してはいるものの、このような方面への彼の関心の深さがわかる。

三編の四月五日では、「むかしだん」「というものについて説明する。

「平根尾ひらねおといふ、に(丹)つちの山ぎはをうがてば、『むかしだん』てふものいづ。ちひさきは枇杷梅の実、おほきなるは、いもがしらばかり、まろく、まじるにて、くだけば燧火つゆの石のごとく、まなかに黄あるはくろく砂のやうなるものこもれり。ながさ七八間、巾二間ばかりのうちののみありて、ほかに、ふつになし。土のうへに、しろくあらはれたるを、とめてうがてば、いものこのつるになりたる」と、いくらも

ならびてあり。そのすぢ、ほりあてねば、いでがたし。つちよりなりいづるとおもはれ、わかきはちひさくて、いとかたく、いろ白し。ねびたるは、おほきくくるくなりて、木竹などのくちたるごと、くだけやすし。禹余粮のたぐひなるべくや。さるすぢにくらければ、わいだめがたし」

同じ十五、十六日にも、石英についての描写がある。その他にも「勾玉」に関する詳しい記述など、鉱石についての記事は桃樹の紀行中にしばしば登場している。

風景描写など

このような、的確な観察に基づき正確な描写は、たとえば第三編の伊豆紀行、第四編の東北紀行を中心に桃樹がやはりよく記している、温泉の説明にも共通する。

第三編の四月七日では、あまり好ましくない温泉の様子を次のように描く。

「ここに、大湯おほゆ小湯こゆまぶの湯といふあり。小湯は、きたなげなるふせやのうちに湯ぶねをまつけ、大湯は、やねもなくふたつともかなけいみじく、みつはにびいろにてぬるし。ひとたびゆあみしけるに、やまひにはかへりて、あしかりぬべくおぼえぬれば、とくいぞ、まぶの湯へはあすこそ」とて

このような具体的で明確な説明は、初編の出雲国の龍蛇の

描写にも見え、次編の六月二十二日の、「胎内くぐり」の様子を描く、

「一里ばかりゆきて胎内といへる洞のもとにいたる。あない(案内)のもの、をし(教)ふるまにまに、かしら(頭)はぬの(布)もてつつみ、ひざ(膝)にもわらぐつ(藁沓)をつけ、とほし火をてらし、せ(背)くぐまり入に、おくはいよよせまく下のかたへふか(深)ければ、かしら(頭)よりはいい(入)りがたう、はらばひ(腹這)てあし(足)をのばし、および(親指)のあたる所をふまへ、手はさは(触)るいはかど(岩角)をとらへ、そをちから(力)に、ひととき(ざ)一刻(みづつくだり)」「ほらのうちは、なめらかにて、むらさきの色せしいはほにて」

の一文や、一見伝統的な美文と見える以下のような風景描写にもつながっている。

「保土谷のあたりまでは桃一重桜はさかりにて、菜の花もなかば咲、八重桜はやうやうふふみて、麦は四五寸よんごすんばかりになりたるを、南郷、梅沢のほとりより、もも、一重いちじゅうなぐら、菜の花はちりはてて、八重桜、山吹、つつじなどさかりにて、麦は尺にあまり、穂もあらはれつ。こは海によれる国にて、あたたかなればなるべし。」

「みどりふかき松の木の間に、雪のごと咲ものこらぬさく

らの、おひ風に、さとかほりくるもなつかしう、たにかげ、
岨ななどに、さきこぼれたる苔つじの、夕日にてらされて、
もゆばかりなるも、見すてがたう(略)(十三日)

いずれも第一編の文章で、美しい文章というより正確な文
章という要素を感じる。または、正確な記述が結果として美
しい描写を生んでいる。非常に微妙なところだが、型にはまっ
た美文に見えて、科学的な観察を交えた清新な描写とも見え
る。

これ以外の、たとえば十一日の浜辺の景色では桃樹は「や
わらかい砂」について触れるなど、五感を駆使した描写を行
う。また、浜辺の漁民、田畑の農民といった人々をそれらの
情景の中にとりこみ、活動する人間を美景から排除はしない。
十五日の険しい山路の風景も、十六日の粗野な外見の炭焼き
の男の描写も、桃樹の筆致にさして嫌悪感は見えない。珍し
い鉱石も、不快な浴場も、美しい風景も、桃樹は等しく丁寧
に描写し、そこに価値観や感情は入り込まない。

旅の実態

桃樹は次編の六月十四日に、笹子峠の付近で、恵林寺に關
心が深かったが立ち寄りなかつたことにふれて、

「とりどりゆかしう聞ゆるものから、おほちより二里あま

り隔り、ゆくさきのついであしければ、えいたらず。いゆき
いたらぬ所を、かくいふはうちききめきたれど、」のち、あ
すむ時のしをりにも」と、かいつけおくめり」と記す。

近世の紀行には、「ここから先はしばらく茶店がないから
休憩はここで」といった実用的な情報が記されることがまま
あり、蝦夷紀行に典型的なように旅行の際の案内書としての
実用性が重視されることも多い。桃樹がここに書いているこ
とも、紀行作家としては、さほど珍しい姿勢ではない。ただ、
おそらくどこかそのような「実際の旅の参考になれば」との
意識をよりどころにしつつ書かれたのではないかと思う。
以下のような記事は旅の実態を示すものとして面白く、文学
性も具えている。ここにも「実用性」をいわば口実にして文
章を書きながら、明らかに文学創作としての喜びを感じてい
たであろう貝原益軒との共通点がある。

次編、七月朔日の、

「海人の家のおほく、小田原よりあたみまでのうち、ここ
ならでは、のみくうものもなければ、ひるのいひたうべ、し
ばしいこぶ。なほ山路なれど、石もなく坂もややならかな
れば海山を見わたしつつ行」

などの記述も、あるいは情報性に配慮した記述だったかも

しれないが、結果としてリアルな描写を生んでいる。

こういつた記述態度は、六月三日の山中の独行の強行軍を描く、

「泊まるべき（いへの、あまりなるまできたなげに、いぶせく、やまぢを二里ゆけば、瀬見のいでゆあり」と聞ゆるを、かしこにやどりたらまくほりして、おのれひとり、すすみたちぬ。すさも、いといたづ困じにければ、ものおはせけるをのこにそひて、あとよりゆるらかに」と、いひすてて、ひたぶるにいそぎけれど、日はくればてて、あやめもわかず、かたはらには山川みなぎりながれ、この日「ころ耳なれし水のおとも風のひびきも、げにおどろおどろしく、をりをりとびかふほたるのひかりをたのみつつ、たかき山々のあひだをたどりつつゆく。おほかみ、こだまなども、かたちをあらはしぬべくおもはれ、ところどころながれいづるしみづに、はぎをひたし、つとさしいでたるいはかどにつまつきなどし、からうじて瀬見のこなたなる山川のふちにいたりつく。さいつころ水いでて、ながれたりとて、橋おち、わたるべきやうなければ、こゑのかぎりよばひけるに、かしこのきしより舟こぎよせけるもうれしく、とくのりて瀬見のきしへのぼり、人やとす家へはひいりて、いきのべぬ。ややありて、すさも、ものおへるをのこも、来りけるに、すさは、はらだたしげに、

ものもえいはいで、わらぐつぬぎすてしのみにて、あゆひもとかず、ものもたうべず、うちたふれていなたり」

五編の八月廿三日の、

「飯能にいたりしころは、午も過て、いといたくうゑにければ、ものうる家に入て、いひをこふに、よね妻はさらにもいはず、あはにまれ、ひえにまれ、いひてふものは、ふつになし」と、むくつけくこたふ。何によりて飯能とは名づけし」といぶかしく、「こをもておもへば、ひとの国にて里の名をいみ（勝母里不住」と傍書）、すまひをさりし、といふも、あだことなめり」など、たはむれつつ」

といった読み物としての面白さにもつながって行く。このような緊迫感や強烈な印象は残さないが、同じ十日に汐越の付近の浜で漁師に鯛をもらう、

「汐越をたち浦わをゆく。あまどもあびきし、六七寸ばかりのたひ、あをさはなど、をかのこと、かつぎあげしを、たちとどまり見あたりしに、あまひとり、かのたひ二つ三つもち来り、「これまぬらせむ。つとにしたまへ」とてあたへつ。しろ（代金）はうけぬを、さりとて、むらい（無礼）せざらんや。さかてにも」とて、あながちにせにとらせて、すきぬ

のような一場面などは、おのずと旅の情景を描いて文字と

しての感興も読者に与えるものとなっている。

上記のような文章の数々を見てみると、桃樹のこういった姿勢には、「実用性」をいわば口実にして文章を書きながら、明らかに文学創作としての喜びを感じていたであろう。貝原益軒〔注〕との共通点があるように思えてならない。

主張 見解、考察

時代を問わず紀行の魅力の一つは、折りにふれて披瀝される作者の思想や哲学を示す述懐のあれこれである。「槃游余録」は、鈴木氏も指摘されるように、古代研究に関する記述が、特に初編では非常に多く、そこには作者のさまざまな見解、分析が記されている。

ただ、これをどの程度、どのような意味で、桃樹の特徴と見るかは微妙である。たしかに桃樹の古代研究への関心は強い。しかし、それだけではなく、歴史一般への興味も深い。それは近世の紀行作家たちに大なり小なり見られる傾向でもある。幕末には伴林光平の「巡陵記事」（安政四）「野山のなげき」（文久二）といった天皇陵巡りの紀行も登場するように、天皇陵もまた題材となることが多いが、これもまた、思想的な風潮とばかりは言い切れない、近世全体の広い層にわたっての「歴史的なものへの興味」と強くつながっている。

桃樹に限らず、この点については今後なお綿密な分析と検討が必要となる。

それ以外にも、桃樹は随所で、鈴木氏が「考証的態度」と評された考察を行っている。初編では、「鴨立つ沢」の西行庵旧跡について詳しく説明しながらも、根拠はないと批判しており、見聞をそのままに記した上で批判する、こうした姿勢は四編の東北紀行での四月二十九日、「しのぶもじずり」に関する記事にも見える。

「袖中抄などにも、このこほり（郡）に『もぢずり』とてみだれたるすりをこのみすりけるよし見ゆれど、そもそも衣にあやなせしは、黄土（はに）、藍（あゐ）、月くさ、萩など、くさぐさにて、この里にかぎり、すり布をいだせしにもあらず。まして石にてすれること、いにしへかかず。例の、ことこのめるもの（好事家）のつけそへるにや」と、かしこまではいららず」

同じ四編の五月九日、松島の条では、かなり激しい口調で仏教批判を行う。これも益軒を初め、儒学者、国学者を問わず知識人にはよくあることで、桃樹のここでの記述もそうだが、宗教批判というより、古跡の俗化という点での慨嘆が強いように私には感じられる。

四 近世における「紀行」あるいは「紀行作家」

近世において紀行を書いた人々が、どの程度自分を「紀行作家」として意識していたのかを判断するのは難しい。また、紀行というジャンルや、作家圏のようなものが明確に成立していたかどうかも疑問である。

もともと、「個人的な思い出と、子孫に見せるために書いた」「単なる手すさびなので早々に破棄してほしい」といった文章が序跋に記されることも少なくない紀行は、日記文学と同様に、読者を意識せず孤独な営みとして書かれることが伝統で約束事にもなっている面があり、かなりの大作、傑作でも当時の他の文学活動とは関連なく書かれていることが珍しくない。

しかし一方で、特に近世後期の国学者たちの紀行制作に見られるように、相互に読みあい批評しあう活動が日常的に行われている様子が推測できる例もあり、紀行あるいは紀行作家という定義が、明確なあるジャンルとして幾分か意識されてきた可能性もある。

近世の紀行作家の代表的な人々としては、前期の貝原益軒（寛永七・一六三〇）正徳四・一七二四）、松尾芭蕉（寛永二一・一六四四）元禄七・一六九四）、中期の本居宣長（享

保十五・一七三〇）享和元・一八〇二）、高山彦九郎（延享四・一七四七）寛政五・一七九三）、橘南谿（宝暦三・一七五三）文化二・一八〇五）、古川古松軒（享保十一・一七二六）文化四・一八〇七）、菅江真澄（宝暦四・一七五四）文政十二・一八二九）、遠山景晋（宝暦一・一七五二）天保八・一八三七）、後期の渡辺崋山（寛政五・一七九三）天保十二・一八四二）、中島広足（寛政四・一七九二）文久四・一八六四）、小津久足（文化元・一八〇四）安政五・一八五八）、松浦武四郎（文化十五・一八一八）明治二十一・一八八八）などである。更に加えるなら、松平定信（宝暦八・一七五八）文政十二・一八二九）、大田南畝（寛延二・一七四九）文政六・一八二三）、清水浜臣（安永五・一七七六）文政七・一八二四）、渡辺政香（安永五・一七七六）天保十一・一八四〇）といった人々があげられよう。

この作者たちの記した作品はほとんどが大部であり、長編、多作ということは近世紀行の場合、内容面の質の高さともつながるといってよい。

これらの作家たちの名を見ても推測できるように、彼らの紀行制作がどれだけ他の紀行作家たちを意識して相互の影響関係のもとに書かれたかは、状況によって異なり、一概には判断しがたい。だが、博物学者と国学者を軸とした、ある種

の交遊圏が成立しているのではないかという印象を漠然と持つことが多い。

桃樹の場合もその一つで、紙幅の関係で十分に紹介できなかったが、「樂游余録」の初編から三編にかけて附された長い序文の数々には、紀行制作の交遊圏がおぼるげにも成立していたこと、その中で桃樹が一定の位置を占めていたことがおのずと示されているだろう。

近世前期の貝原益軒がその基礎を作った、博物学者としての冷静な観察眼と客観的で正確な描写が、国学者たちの細やかで個人的な心情まですくいとる文体にうけとめられて、後期に小津久足のような、近世紀行の一到達点としての名作を生み出して行くにいたる過程は、おそらく一つだけではなく、さまざまの流れや道筋が存在するだろうが、吉田桃樹の諸作品は明らかにその中のいずれかの地点で確かな役割を果たしているはずである。そして、やや大胆な言い方をするなら、社寺の伝承記事の紹介を中心とした「所歴日記」、読み物としての面白さを意識した「千種日記」、作者すなわち主人公が活躍する冒険記的な要素の強い「未曾有記」、挿図の面白さが本文をひきたてる「官遊記勝」、名所図会風の案内記の体裁をとって実用性が強い渡辺政香の諸作品、流麗な和文で文学性を追及する清水浜臣の諸作品、といった、他の紀行作

家たちの作品と比較した時、桃樹の紀行は、そのやや硬いが正確で無駄のない文体、特徴がないと見えるほど釣り合いのとれた記事の内容、などの印象は最も益軒の作品をよく継承するものと私は考えている。

注

注1 なお、「樂游余録」の諸本の数点は、末尾に太田元貞の「墓表」を附す。内容は「譚海」の記事とほぼ同一。他に「古老雑話」（「江戸時代文化」所収）は、桃樹と遊女の交遊についての逸話を記す。また「史氏備考」（慶応大学、静嘉堂文庫）の巻四にも伝記があるが未見。

注2 鈴木氏も記されるように、平沢元愷の「漫遊文章」は当時非常によく読まれた漢文紀行である。

注3 村上島の丞とも言い、景晋の「未曾有記」にもよく登場する。最上徳内などと並ぶ蝦夷探検家の一人。自らも「蝦夷島奇観」の名著がある。彼と桃樹との出会いは、三編、五月十一日の条に、「安久村（秋山）章がりいたる。あるじ（章）、はた樟丸（この家に滞在中だった）いでて、これかれものがたりし」と記されている。

注4 拙稿「貝原益軒と紀行文」（拙著「江戸の旅と文学」・ペリカン社刊に所収）を参照されたい。

（いたさか ようこ・福岡教育大学教授）